

「歌と日本語」補遺

勝 又 浩

最近、日本語は母音を基礎とするという言語の性格について長年研究している角田忠信の近著『日本語人の脳』（平成28年4月、言叢社）を読んで私はまさに目から鱗、いや鱗どころか目玉が飛び出すほど驚いたので、ここにはそれを少し紹介し、併わせてそこから考えさせられたことを二、三書いておきたい。以下は前稿「歌と日本語」（『季刊遠近』60号）の補足として読んでいただければ幸である。

角田忠信といえば、日本人には情緒を刺激する虫の音が、西洋人にはただの雑音にしか過ぎない、脳が自動的にそういうふう聞き分けるのだということを教えてくれた、あの『日本人の脳』（昭和53年）の著者だ。その人が「日本人の脳」という発見からさらに突き進めて、この本ではとうとう「日本語人の脳」とまで言うにいたったわけだ。日本語は世界の言語のなかでもそれほど特異特殊な性格を持っているのであるが、我々はまずその事実をこそしっかりと受け止めなければならぬであろう。

たとえば、卑近なところで日本には「五十音図」というものがある。字を習い始めれば誰もが最初に覚えるのがこれだし、日常生活でもさまざまなところで「五十音順」という制度にぶつかると。それだけ生活に溶け込んだ、普段は意識することも考えない、いわば日常使っている道具のようなものだ。その由来については厳密なことは知らない。ただ、いろは歌の弘法大師作伝説とは違って、「五十音図」は梵語にそのルーツのようなものがあつてそれを日本語に応用した例が既に平安時代にあり、のち江戸になって契沖が今の形につくり上げたと、そんなほんやりとした概念しかもっていなかった。

ところが、この本によれば、そもそも「五十音図」など持っているのは世界中でも日本だけだということから驚くではないか。梵語の分類も、それ自身日本人がやったことであつたという。もちろん、アイウエオの母音自体はこの言語にもある。アマゾンの一部族のように母音を三つしか持たない言語もあれば、お隣の朝鮮語には九つあるし、フランス語には一一種もあるそうだ。そのくらいのことには私も何となく承知はしていた。だから、日本の「母音文化」（と角田忠信は言う）とは言っても、それは母音の数の問題ではないのだ。たとえば西洋ではイタリア語も母音が多いことで知られているが、それでも母音だけで意味を持つ単語はないのだそうだ。日本語なら、ア||吾・足……、イ||井・猪……のように母音一つで意味を持つ単語はたくさんあるが、こんな言語は世界でも日本だけなのだからこれも驚く。

だが、「母音文化」で本当に驚くべきことは、単に他の言語にはない「五十音図」が日本語にあるという事実だけではない。それ以前に、あの合理的で明解な表に表せるような、全言語音声アイウエオの五音に集約するような母音体系が存在すること自体なのである。子音と母音が常に組み合わせられている日本語音声、英語なら *pitcher, catcher, strike*（このeは発音しない）のような子音が重なってゆくような語・音声がないという言語構造である。あるいはガラスのような例——元来はオランダ語の *glass* を、日本人は母音を倍増して *garasu* と言い換えて、それに硝子と漢字まで当てて日本語化してきた。

逆に言えば、他の言語には単に「五十音図」が無いのではなくて作れない、つまり表にできるような、母音体系が無いのだ。「五十音図」が可能になるような言語音声をもつのは世界中でも日本だけ、いや厳密にはもう一つポリネシアの一部にあるだけだという。日本語はそれほど特異な言語だったわけだ。

こんなことを知って、私がまず思ったのは大野晋のこと。日本語のルーツをインドの一地方語、タミール語だとした彼がこれを知いたら何と言ったろうかという連想だった。むろん残念ながら大野晋はもういない。いや、角田説はなにも昨日今日発表されたわけではない。『日本人の脳』から数えても四〇年近くこういうことを言い続けてきたわけだ。であるのに国語学や言語学の世界では大方無視されてきたということだから、大野晋も知ってはいたが向き合おうとはしなかった、おそらくはそんなところが真相だったのだろう。角田説は、彼らには言語学ではなくて音声生理学か脳生理学でしかなかったらしい。

しかし、話が少し逸れたかもしれない。重要なのはこの先なのだ。

日本語のこうした性格は当然日本人の脳の働き方にも深くかかわっていて、いろいろな面で西洋ともアジアの他の民族とも違う「日本語人」の性格をつくっている。ちなみに言うと、日本語と先祖は一つだとされてきた韓国語、その「韓国語人」の脳の働きは「日本語人」とは違って、むしろ西洋人型に分類できるというのだから、これも面白いし、また不思議だ。角田説の特異なところ、凄まじいところは、この脳の働きから言語の性格を考えているところなのだ。詳しくはこの本を見ていただくしかない。ただ「日本語人」という特異なことばについてだけ少し補足しておけば、それは概略こんな意味である。

脳から見れば日本人という人種があるのではない。あるのは日本語という特異な言語が、それによって育った人、使う人を規定して、彼の脳の働きを、従って文化的感性をも決定づけているのだという事実である。角田実験によれば、人種や肌の色に関係なく、人はだいたい九歳までに仕込まれた言語の種類性質によって、いわば「言語人種」が決まってしまうのだという。たとえ日本で育っても、九歳までに身につけた言語が日本語以外の言語であれば「日本語人」にはならないし、その逆も同じ。外国で育っても九歳までに身につけた言語が日本語であれば、脳はちゃんと「日本語人」になっているというわけだ。

このすべての音を左右の脳に振り分ける脳の不思議な神秘的な働きについて、本書にはまた別の話もあるのだが、ここでは省略しよう。今は歌にかかわるところだけを少し拾ってみると、たとえばこんな問題がある。

「日本語人」は左脳言語脳で母音も子音も受け取るが、西洋人が左脳言語脳で受け取るのは子音だけ、母音は右脳に行ってしまうのだという。これだけでも母音が中心の日本語と子音が中心の西洋語の違いは明瞭だろう。更にそこから関連してもう一つ言うと、日本人は虫の声、波の音、邦楽器の音も言語脳で聞き取るが、西洋楽器（ピアノ、ヴァイオリンらしい）の音は雑音と同じ右脳に任せてしまう。つまり「日本語人」の脳は音楽も和（左）と洋（右）とでは脳を使い分けてしまうらしい。和も洋も音楽は一つ、世界は一つだと思っていたが、リズム感のところでもみたように脳のレベルまでゆくと、そう簡単ではない。音楽もやはり言語の性格と切り離すことはできないのだ。そして、総じては次のようになっていく。

「日本語人」の脳はロゴス的なもの（言語）も、パトス的なもの（泣、笑、嘆）も、自然的なもの（虫、鳥、風）も、すべて言語と同じ左脳で受け止めるが、西洋人の脳は先に言ったように言語・子音以外の音はすべて、言語でさえ母音の方は雑音と一緒に右脳に任せてしまう。言い換えると、西洋人の脳は理性（ロゴス）と情緒情念（パトス）と、受け止める場所を截然と分けているが、日本人の脳は理性（ロゴス）も情緒情念（パトス）も同じ脳（左）で受け止めているのである。結局のところ、そして良くも悪くも、「日本語人」は情緒的性格を免れない「人種」なのだ。

こんな事実からは、もうじつとしてはいられないほど限らない連想、文化の問題に誘われるのではない。「日本語人」という、生理的段階からして特異な性格の「人種」があるのだから、それから生まれた、それらを反映した特異な文化が存在しても少しも不思議ではないであろう。短歌も俳句も小説も、日本の文芸は論理的思想的でないと言われるのは、一面では日本語のこの性格から必然した、いわば宿命だったのだ。もちろん、だからと言って日本の文芸が劣るとも、逆に論理的思想的である文芸が、それ故に優れているとも、私は考えていない。性格に、特徴に優劣はない、文芸に求めるものが初めから違っているのだ。

それで、たとえば私は東西の詩の性格の違いということも考える。頭韻脚韻（これは子音を基本とする言

語から生まれた形式なのだ)の約束を細かく言う西洋の詩と、一方、「季語」まで決めて自然を取り込んでゆく日本の詩・短歌俳句、この違いは風土、自然環境の違い、モンズーン型か砂漠型かなんぞの違いである以前に、まず言語の性格の違い、その結果としての脳の働きの違いに拠っていたのである。しかしこのことはまた改めて考えることにしよう。

*

本年は「季刊遠近」の創刊二〇周年になるそうで、まずはおめでとうございますと申し上げよう。同人雑誌は、その一面は三号雑誌五号雑誌の世界だから、そうしたなかでの二〇年、六二冊というのは立派な行跡に違いない。しかし言うまでもないが、全国の同人雑誌のなかには戦前から続いているものもあるし、戦後でも、いま書店に並んでいる文芸誌より古い歴史を持つものが幾つも存在する。そうしたなかで見れば二〇年などはやっと成人になった年頃、ということになる。まだこれからも二〇年、三〇年と続けて、地域の文化の一端を担うくらいの存在にならなければいけない。そう、考えたい。

話は変わるが、京都八幡市に、今度国宝になるといふ石清水八幡宮があるが、その足元に「飛行神社」がある。大正四年に二宮忠八という人が創建したものだといふ。彼はアメリカのライト兄弟より一〇年も早く飛行機を設計していて、徴用されていた陸軍に上申したが取り合ってもらえなかった。仕方なく自力での製作を決意して準備をしているうちにライト兄弟に先を越されてしまった、という経緯があった。それで、彼は飛行機製作を断念、用意した資金で、飛行機事故で亡くなった人たちの霊を慰めるべく「飛行神社」を作った。祭神は饒速日ノ命。神社の種類としては靖国神社と同じ招魂社というものだといふ。現在は航空資料館も付設して、航空事業関係者などに信奉者がいる。

この「飛行神社」の存在で初めて知ったが、神社というものは一定の資格(敷地など)を持ち、手続きを

踏めば個人でも創建できるらしいといふことだ。そういえば、赤坂には乃木希典を祭った乃木神社があり、渋谷には東郷(平八郎)神社もあった。近代になってからでも神様になった人はいるわけだ。それで私の妄想が始まったのだが、「同人雑誌神社」を作るのも悪くないといふことである。

何度か書いたことだが、同人雑誌という制度はヨーロッパにもアジアにもない、日本独自の文化である。その淵源は、広くは茶道華道書道など諸芸道と、文学の方では短歌俳句の結社と一体である。日本人は歌垣の者から、さまざまなかたちの、しかし「参加型文芸」が好きで、それを育んできたのだが、その近代になつての展開が同人雑誌なのだ。だからそれは熊野古道や和食と同じように日本の誇るべき世界遺産でもある。オリンピックなんか止めて、そのお金で資料館、研究所、情報センターを併設した「同人雑誌神社」を作りたいものだ。

